

# 第12話 邦人の海外進出

## 中国人が大いにおそれた倭寇

さて、次には織田信長が尾張から起こり、地の利と拔群の知略とでもって逸早く京都に出て、天下統一の端緒を開き、新たに安土時代という一時代を制したことを述べるべき順序ですが、その前に、海外との関係について話しておきたい事が2、3あります。その第1は、戦国時代における邦人（訳注：本邦人、日本人）の海外進出です。その第2は、西洋人の渡来です。その第3は、キリスト教の伝来です。

それで、この話では、先づ第1の邦人の海外進出からお話します。

鎌倉時代に、執権北條時宗が、未曾有の国難でありました元寇を見事に撃退してから、しばらくの間は、いつまた元が重ねて来襲するかもしれないので、すべての軍備をゆるめずに続けたことは、すでに皆さんは第三巻の第3話元寇で読んだ通りです。しかし、それが5年経ち、10年経ち、15年経ち、何の事もなく、いよいよ敵はもう来ないとなると、中に張りつめた気のゆるんだ事もありましたが、中には、この上はいっそこちらから出かけて行って、あべこべにむこうを征伐してくれようとする者なども出て来ました。わけでも我が西南の地方は、特に海運の便が多いので、海事思想が発達して、早くから海外に交通する者のいた処だけに、そういう考えを抱いた者が多かったのです。

### 倭寇

こうして、鎌倉時代の末からすでに九州および瀬戸内海の住民のうちには、党を結んで中国（当時は支那と呼んでいました）や朝鮮の沿岸を侵掠した者がいました。吉野（南北朝）時代になると、内地で志を得ない者が海外で大いにその驥足を伸ばそうとしてこれに加わったので、ますますその勢いがさかんになった。中国人はこれを倭寇と呼んで大いに恐れました。

しかし、最も多く倭寇に悩まされたのは朝鮮半島の高麗国でした。高麗は先に元の保護国となって以来、しだいに国勢が衰えていたところに、更に連年、倭寇の侵略をうけて頗る弱った。それで、しばしば使いをわが国に遣わして、倭寇を禁じてくれるようにと求めて来た。しかし、倭寇はもともと烏合の衆でして、どこに向ってこれを征討するという事も出来なかったので、時の將軍足利義満はその由をいって、これを断った。

### 李成桂

高麗はいよいよ困ったが、たまたま李成桂という英雄が出て、漸く倭寇を撃退した。その功によって、李成桂の聲名はにわかに高くなり、その威望ははるかに王者をもしのぐに至った事を見ても、いかに高麗の上下が倭寇に苦しんでいたかが分かります。その後、李成桂はますます勢力を得て、ついに我が南北朝合一の年に、高麗の恭讓王を廃して自立して、漢陽（今の京城、ソウル）に都して国号を朝鮮（訳注：李氏朝鮮）と改めた。これが戦前の李王家の太祖です。

## 第12話 邦人の海外進出

とはいえ、倭寇はその後もなお全く止まなかったの、朝鮮国王はしばしば使いを周防（山口）の大内氏に送って修好を求めて、その都度、海賊を禁じてくれるようにと請うた。そのころ、明及び朝鮮の貿易は、もっぱら大内氏が掌っていたからです。

### 明の太祖

また、中国は、その頃、すでに元が亡びて、明が新たに勃興していたのですが、これもまた倭寇の侵略には苦しみました。しかし、もとより大国であった上に、新興の勢力もまだ盛んだった大明国のことですから、先づ恫喝して、日本を屈服させようとしたのでしょう。明の太祖はしばしば使いをわが国に送って、修好と倭寇の禁遏とを求めて来ました。しかし、その文辞がすこぶる無礼でした。それで、そのころ、大宰府においででの征西將軍官懷良親王の手にそれが入った間は、親王はその無礼を怒られて、返事もおやりにならずいた。しかし後に、それが將軍義満の手に渡ると、義満は貿易の利を取めて幕府財政の窮乏を補おうとしたので、その求めに応じて交通を開くと共に、西南の諸国に令して、きびしく海賊を禁じさせました。

### 八幡賊

それがために一時、倭寇の侵略はやゝ衰えたが、応仁の乱後に室町幕府の威令が全く行われなくなるや否や、その徒の勢力は再び盛り返して、更にいっそう烈しくさえなりました。彼等は数十艘の軍船をそろえて、八幡大菩薩と書いた旗をおしたてて明の地に渡り、さながら疾風が枯葉を捲くが如くに、沿岸一帯の地を荒らしまわったので、明人はこれを八幡賊とも言つて大いに恐れた。わけても、後奈良天皇の天文22年3月から弘治3年11月に至る5年間の如きは、汪直という明の暴民といっしょになって、今の上海から蘇州、南京、燕湖、杭州にかけての一帶の内地にまで入って、侵掠をほしいままにした。明の官兵も幾度かこれの討伐に向つて来たが、容易にその功を収めることが出来なかったのです。

その頃の中国の書物によると、倭寇はたいい身軽な扮装をして、日本刀を携えて、進退の合図には法螺を吹いたということで、その動作がきわめて敏捷でした上に、また、実に大胆不敵でもあったそうです。弘治元年に燕湖から南京方面までを侵した一隊の如きは、僅かに6～70人の少数で、80余日にわたって、数百里の間を思いのままに蹂躪してまわったということです。

こうして、わが国民の冒険心は、おのづから振るい起こされて、しだいに遠洋に航海を試みる者なども出て来ました。

（第12話 邦人の海外進出 終わり。 次は前頁に戻り、第13話 西洋人の渡来 へ）